HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	障害者スポーツ・ボランティアに関する社会学的研究 ： スポーツ実践者とボランティアの関わりに着目して
Author(s)	山崎, 貴史; 植田, 俊
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 138, 427-440
Issue Date	2021-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.138.427
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82161
Type	departmental bulletin paper
File Information	24-1882-1669-138.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院教育学研究院紀要
第138号　2021年6月

障害者スポーツ・ボランティアに関する社会学的研究

―スポーツ実践者とボランティアの関わりに着目して―

山　崎　貴　史*・植　田　　俊**

【目次】

1.　はじめに
2.　スポーツ・ボランティアに関する研究の整理
　2-1 スポーツ・ボランティアの定義について
　2-2 障害者スポーツのボランティアに関する研究
　2-3 本研究の視座
3.　対象と方法
4.　考察
　4-1 車椅子使用者を支える大学生
　4-2 車椅子ソフトボールを楽しむ大学生
　4-3 大学生にとっての車椅子ソフトボール活動
　4-4 支え合う関係，楽しみの共有，結果として支える
5.　おわりに
注
参考文献

【キーワード】障害者スポーツ，スポーツ・ボランティア，競技参加型ボランティア

1.　はじめに

本稿はボランティアについて，障害者スポーツに着目し考察するものである。とくに，スポーツ実践者とそれを支えるボランティアの関わりに焦点を当てることで，ボランティアに関する新たな研究視角を示すことを目的とする。

近年，日本において，社会的弱者やマイノリティーの支援として注目されているのがボランティアである。ボランティアが定着するきっかけとなったのが，1995年の阪神淡路大震災である。この大震災では，地域社会や行政が機能不全に陥り，全国からボランティアが集まり，支援活動を展開した。1995年は「ボランティア元年」と呼ばれるなど，ボランティアという支援のあり方が大きな注目を集めた。それ以前，私たちの社会では他者への支援は地域社会の社会奉仕や行政サービスという枠組みで行われてきたが，1995年を契機に様々な主体に

* 北海道大学教育学研究院・講師
** 東海大学国際文化学部・講師
DOI：10.14943/b.edu.138.427

よる支援活動が登場したのである。

こうしたボランティアは自発的な意志に基づき他者や社会に貢献する行為や活動と一般的に理解され,「他者に対する利他的な行為」としてポジティブに語られることが多い。しかし,その一方で利他的な行為であるはずのボランティアに対する批判があり,いくつかの課題が示されている。例えば,原田(2000, 2017)は自身の経験から,ボランティアが「される側」,「拒めない」立場の人たちを一方的に作り出してきたと批判する。また,ボランティア活動がする側から受ける側への一方的な贈与であるがゆえに,受け手が負い目感情を抱くことも指摘されている(渡邊・新矢, 2004)。くわえて,ボランティアの受け手が自身のニーズを伝えることができないなどの問題も指摘されている(崎山ら編, 2008)。これらの批判はボランティアという行為が実はそれを受け取る側への権力的な働きかけであること,そして「利他的である」とされるボランティアがこうした権力性に無自覚な点に向けられている。

本研究は以上のような批判や課題を引き受けつつ,新たなボランティア研究の視角を提示することを目的する。その際に,障害者スポーツをとりあげる。障害者スポーツという対象をとりあげて論じる理由は以下の点にある。第一に,障害のある人びとはスポーツ活動に限らず,日常的な活動や行為において,他者の支援を必要とするためである。彼らの日常の中には不可避に他者の支援が介在しており,そこに権力関係が発生していたとしても,他者の支援を必要としている。第二に,スポーツという余暇活動をとりあげることで,従来のボランティア論とは異なった支援のあり様を浮かび上がらせることができると考えるためである。ボランティアや支援論は,災害支援,社会的弱者の日常支援や福祉支援など,「人間の生命維持に関わる」(西山, 2018:3)議論が一般的である。それに対し,本稿ではスポーツという余暇活動に注目して,楽しみを媒介にした新たなボランティア論・支援論を模索してみたい。具体的には,車椅子使用者のスポーツを事例とし,筆者が行ったフィールドワークのデータから,ボランティア研究において,障害者スポーツがもたらす新たな知見を示していきたい。

2. スポーツ・ボランティアに関する研究の整理

2-1 スポーツ・ボランティアの定義について

先行研究を整理・検討する前に,まずスポーツ・ボランティアの定義について簡単に整理しておきたい。2014年に文部科学省と笹川スポーツ財団によって刊行された「スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究」の定義を紹介しておきたい。この調査では「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議」(文部省, 2000)を参照し,スポーツ・ボランティアを「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において,報酬を目的としないで,クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり,また,国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて,専門的能力や時間などを進んで提供し,大会の運営を支える人のこと」(笹川スポーツ財団, 2014;4)と定義している。

社会科学領域では,スポーツ・ボランティアの特徴として「自主性」「社会性(公共性)」「無償性」を挙げる研究がほとんどである。武隈(1997)はスポーツ・ボランティアを「個人の自律的な決定と選択に基づく,公益性,非営利性を前提としたスポーツに関わる社会的活動,およびその行為主体」(武隈, 1997:59)と定義している。また,山口(1998)は「個人の

自由意志に基づき，その知識・技能や時間などを進んで提供し，社会に貢献すること」（山口，1998:24）と定義しており，「自主性」「公共性」「無償性」をその特徴として挙げている。

さらに，確認しておきたいのは，それが「するスポーツ」「みるスポーツ」というスポーツ行動から切り離され，「支えるスポーツ」として捉えられている点である。例えば，山口（2004）はスポーツ・ボランティアを「支えるスポーツ」と捉え，それがスポーツ文化の発展に寄与するものと指摘した。また，二宮（2017）はボランティアに対して，「するスポーツ」「みるスポーツ」とは異なる別の面白さや楽しみを見いだすことができるとし，「支えるスポーツ」としての意義と魅力を語っている。

2-2 障害者スポーツのボランティアに関する研究

障害者スポーツのボランティアについては，上記の定義をもとに，障害者スポーツに関わる指導員やボランティアの現状，彼らの動機や参加継続の要因が明らかにされてきた。ボランティアの参加動機と活動期待を7つの要因（障害者理解，人との交流，技術提供，自己成長，社会貢献，非日常体験，社会的有利）から明らかにした谷ら（2003），参加要因を障害者スポーツの認知度や観戦・体験経験から分析した塩田・徳井（2016）の研究などがある。それらは要因項目に違いはあるものの，活動を支える人材が不足するなかでいかにボランティアの参加を促進することが可能かを論じている[1)]。

以上のように，障害者スポーツに着目した研究は，障害者スポーツの普及・推進という文脈にボランティアの問題を位置づけ，ボランティアの意識，動機や継続要因を明らかにしてきたのである。言い換えれば，それらの研究は，障害者スポーツ活動に関わるボランティアをその活動を支える人的資源として捉えてきたといえる。

しかし，先行研究は障害者スポーツに関わる動機や活動の継続要因を優先して論じるため，ボランティア活動の内実を注視してこなかったといえるのではないだろうか。つまり，障害者スポーツの現場にボランティアが加わることで，スポーツ実践者とボランティアがどのような活動を成立させ，どのようなスポーツ活動の場を作り出してきたのか。あるいは，両者はどのような関係を作り出しているのか，こうした障害者スポーツ・ボランティアの実際を考察する研究はあまり行われていないといえる。本稿は従来の研究と同様にボランティアが障害者スポーツ活動を支える重要な人的資源であるという視点を共有しつつも，両者の関わりが作り出すスポーツの場の実際を記述することから考えてみたい。

2-3 本研究の視座

数は少ないものの，障害者スポーツ・ボランティアにおける障害のある参加者とボランティアの実際や両者の関係性に迫った研究として，山田（2002）と大山（2015）がある。山田はこれまでの研究が「『する／受ける』の関係でいえば，いわば，『する』側に着目した研究」（山田，2002: 3）であったとし，障害者スポーツにおける〈クライアント－ボランティア〉の関係性に着目する必要があると指摘している。この関係性という視点から，山田は〈クライアント－ボランティア〉関係が，日常的なつきあいによる「親密性」，ボランティアのスポーツ経験や属性に関連する「社会的位置性」，ボランティアの技術に関連した「支援技術性」によって規定されていると指摘している。山田の議論が興味深いのは両者の関係性の様相の特徴や形成過程に着目することで，〈クライアント－ボランティア〉間に生じるコンフリクト

までも明らかにした点にある。

また，大山はスポーツクラブに所属する知的障害者とボランティアコーチの相互作用を具体的に記述している。大山はクラブへの参与観察を行い，参加者とボランティアコーチの関係性を，知的障害者がどのようにボランティアコーチを評価しているかという視点からを明らかにした。参与観察から見えてきたのは，知的障害者はボランティアコーチに対し個別の評価を行っているという点である。大山はスポーツ実践者であり支援を受ける側の知的障害者が受動的にボランティアの支援を受け入れているのではなく，より主体的に支援を評価づけていることを明らかにした。

山田と大山の議論において示唆的なのは，スポーツ実践者とボランティアの関わりに着目することで，〈する側－受ける側〉において生じる権力的な関係を看取した点である。しかし，この二つの研究は〈クライアント－ボランティア〉や〈スポーツ実践者－指導者〉という役割構造を〈障害者－健常者〉というカテゴリーに重ね合わせしまう。つまり，山田と大山は両者の関係における権力的な関係を看取したものの，〈受ける側－する側〉，〈障害者－健常者〉というカテゴリーを自明視しているため，その関係・役割構造を組み替える視点をもっていないのである。本稿では障害者スポーツの現場におけるボランティアの活動に注目し，ボランティアの受け手がボランティアに支えられている，障害のある人びとが健常者に支えられているという関係性を問い直すことを視野に入れて考察していく。

3. 対象と方法

本稿で事例とするのは，車椅子ソフトボールチーとその活動へ参加するH大学の大学生である。この大学では大学教員と大学生が中心となり，同大学の体育館を拠点として車椅子ソフトボール活動を行っている。このチームは大学が位置するE市やその周辺に暮らす車椅子使用者たちを中心としつつも，大学生がコーチやスタッフとして参加しており，車椅子使用者と健常者がともに車椅子ソフトボールを行っている。チームに参加する大学生の多くは同大学の野球部に所属し，コーチやチーム運営など，様々な役割を担っている。本稿では大学生をボランティアと捉え，彼らの役割，車椅子ソフトボール活動に対する意味づけを明らかにする。

車椅子ソフトボールは後述するように，日本ではマイナーな競技である。車椅子ソフトボールは1970年代にアメリカで誕生したが，日本では2000年代に入り少しずつ競技が普及してきた後発のマイナーな競技であり，その競技人口は少ない[2)]。

なお，本稿で用いるデータは，H大学を拠点とした車椅子ソフトボールチームへのフィールドワークから得られたものである。フィールドワークは2017年6月か2018年12月まで行った。調査ではチームの週一度の練習への参加，大会への同行，車椅子ソフトボールの普及を目的に参加するチャリティーイベント，懇親会や打ち上げなど，可能な限り様々な場に参加した。

4. 考察

4-1 車椅子使用者を支える大学生

チームは毎週土曜日に15時から18時にH大学の体育館で練習を行っている。練習には日によって変動があるものの，7名から10名の車椅子使用者，10名以上の大学生，3名から5名の健常者[3)]が参加する。練習の準備は大学生の役割となっている。バット，ボールやベースといった用具や，学内に保管している競技用の車椅子を体育館に運び込む。車椅子使用者は競技用の車椅子の状態をチェックする。大学生は車椅子使用者の選手の指示を仰ぎながら，車椅子のホイールを外し，空気を入れる。また，障害の重い参加者が競技用の車椅子に乗り換える際に，大学生が補助を行う光景も見られる。練習では，障害のある人びとへのサポートが当たり前となっており，それに戸惑う者はなく，和気あいあいと準備は進んでいく。日々の活動からまず見えてくるのが，大学生が車椅子使用者のスポーツ活動を支える存在であるということである。

次に練習の様子を少しだけ記述しておきたい。練習はまずランニングに始まり，キャッチボールを行う。体が温まってきたところで，ノックによる守備の基礎的な練習を行う。メンバーは大きな声を出し，ミスには大きなヤジを飛ばしながら活気のある練習が続く。その後，ティーバッティングや試合を想定した打撃練習が行われ，参加人数が多い場合や試合が近い日には紅白戦を行うこともある。練習の指示を出すのはチームの中心である車椅子使用者，監督やコーチを務める大学生である。このチームに参加する大学生はH大学で野球部に所属している大学生がほとんどである。野球部に所属する彼らはその技術や知識を生かして，チーム練習を決定し，ノックを行うなど，チームの監督やコーチの役割を担っているのである。車椅子使用者と大学生が話し合いながら，練習内容が決められ，それに従ってメンバーは練習に参加する。

大学生のチームへの関わりは毎回の練習だけに限ったことではない。日常的な練習のサポートと同様に，彼らの重要な役割となっているのが，チームの大会への参加や遠征への同行とサポートである。チームが大会や遠征に参加する場合，競技用の車椅子や用具を運搬する必要があり，車椅子使用者がそれを行うのは極めて難しい。そこで，大学生メンバーの何名かは必ず大会や遠征に同行し，チーム活動を支えている。

車椅子ソフトボールチームにおいて，大学生はチームの日常的な練習を支えている。また，大会へ同行し，用具の搬送や搬入を行う。時には大会の運営スタッフや試合の審判を務めることもあるという。車椅子使用者のメンバーによれば，チーム活動は大学生の存在なしには成り立たず，障害のある人びとのスポーツ活動を支える重要な人的資源となっている。以上のように，こうした彼らの活動は障害のある人びとのスポーツ活動を支えており，そのすべては無償で行われている。それは，先行研究の定義からみると，スポーツ・ボランティアと呼んでいいだろう。

4-2 車椅子ソフトボールを楽しむ大学生

ただし，注意しておきたいのは，大学生の役割が障害のある人びとのスポーツを支えるだけではない点である。筆者が調査としてこのチームの練習に初めて参加したとき，何よりも驚いたのが，車椅子に乗り楽しそうに練習に参加する大学生の姿であった。彼らは練習の人

数あわせのために参加しているのではなく，チームの一人のプレイヤーとして練習に加わっている。練習が始まると，彼らは当たり前のように競技用の車椅子に乗り，障害のある人びととともにランニング，キャッチボールを行い，ノックを受け，打撃練習も行う。そして，練習内の紅白戦では，すべての大学生が選手として試合に出場するのである。

そして，驚くべきことは，大学生がチームの一員として公式試合にも出場している点である。チームは毎年全日本車椅子ソフトボール選手権に出場しているが，大学生のメンバーも選手として試合に出場しているのである。

チーム活動だけでなく，競技においても健常者が参加することは，車椅子ソフトボールでは珍しいことではない。むしろ，国内のほとんどのチームには競技者として健常者が参加している。この点を説明するために，車椅子ソフトボールの現状と競技ルールを簡単に整理しておきたい。

車椅子ソフトボールは1970年代にアメリカで誕生したが，日本では2008年頃に競技が始められ，少しずつ普及してきた。1960年代からすでに競技化されていていた車椅子バスケットボールなどと比較すると，後発の競技のために競技人口は少ない。2021年現在，活動するチームは全国で約20チーム，パラリンピック競技でないこともあり，マイナーな障害者スポーツといっていいだろう。

しかし，車椅子ソフトボールの興味深い点は，競技人口の少なさを考慮して，健常者が車椅子に乗って参加することが認められている点である。「車椅子に乗りながらソフトボールを用いて行う新しい野球」をコンセプトとし，障害者と健常者，男性，女性分け隔てなく誰もが同じフィールドで競技を楽しめることを目指している。障害者と健常者が同じフィールドで競技に参加するところに，車椅子ソフトボールの特徴がある。2013年の第一回大会から2016年までの全日本選手権の参加人数の推移は次の図の通りである。この大会は2013年から始まったが，健常者の参加数が障害のある人びとの参加を上回っている。

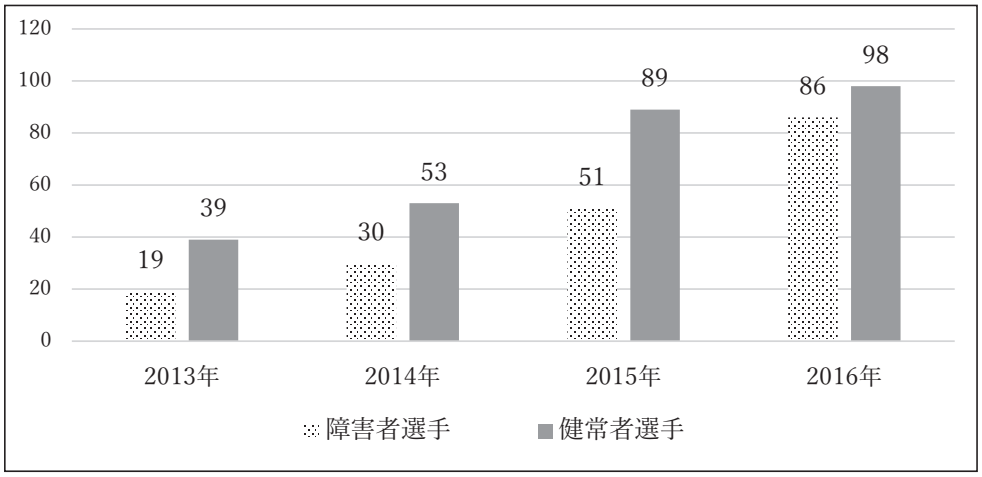

図1　全日本車椅子ソフトボール選手権参加者数の推移

では，どのように健常者は障害のある人びととともに競技を行っているのだろうか。というのも，身体の機能障害をもった選手と健常者がともに競技を行った場合，健常者が有利と

なってしまうことが予想されるためである。多くの健常者が所属するチームが有利となり，障害のある人びとの参加機会を減少させてしまうことになる。こうした健常者の競技への参加を可能にしているのが，クラス分けと持ち点制というシステムである。障害者スポーツ，特に身体に障害のある人びとのスポーツでは，競技者によって身体的な状態が大きく異なる。障害者スポーツでは，こうした身体的な状態の違いを超えて，スポーツの競争性と公平性を保つために，クラス分け，ないし持ち点制というルールを導入している。障害者スポーツではまず選手の身体状況に合わせて，クラス分けを行う。例えば，陸上などでは各選手をクラス分けし，ある程度同じ身体能力の選手のみで競技を行う。そうすることで，競技者間の公平性を作り出すのである。クラス分けは障害の程度が競技やゲームにおける優劣を決めてしまわないためのルールであり，かつスポーツの競技性と公平性を維持するためのシステムといえる。

団体競技の場合は，このクラス分けにくわえて，持ち点制というシステムが導入されている。まず，選手は身体状況に応じたクラス分けがなされ，各選手には持ち点が振り分けられ，点数化される。車椅子ソフトボールの場合は，各選手はクラスⅠからⅢに分けられて，それぞれのクラスには規定の持ち点が付与される。そして，持ち点を割り当てるときに，ちょっとした工夫がなされる。それは障害の程度の重い選手には低い持ち点が，障害の程度の軽い選手には高い持ち点が付与されるというものである。一番障害の重い選手がクラスⅠとされ持ち点が1点，次に障害の重い選手はクラスⅡとされ持ち点が2点，もっとも障害の程度が軽い選手がクラスⅢとされ持ち点3点が付与される[4)]。

このように持ち点を付与した上で，次にチームの出場選手の合計持ち点に制限が加えられている。車椅子ソフトボールは一チーム10名で行われるが，試合に出場している選手の持ち点の合計が21点を超えないように構成することが求められる。チーム内の合計持ち点に制限が加えられている理由は，(1) チーム間の能力の公平性を担保するため，(2) 障害の程度の重い選手の出場機会を確保するためである。つまり，出場する各選手の障害の程度や種類は異なっているが，持ち点制によって障害の程度の軽い選手ばかりを出場させることができない仕組みとなっており，チーム間の能力はある程度公平となるともに，障害の程度が重い選手の出場機会も確保されているのである[5)]。

そして，このクラス分けと持ち点制によって，健常者は車椅子ソフトボールの試合に出場することが可能になる。車椅子ソフトボールにおいて，健常者はクラスⅢにクラス分けされ，3点の持ち点が与えられている。つまり，車椅子ソフトボールでは，持ち点をうまく調整することで，健常者もチームの持ち点の規定の範囲内であれば参加できるように構成されているのである[6)]。

4-3 大学生にとっての車椅子ソフトボール活動

以下は筆者のフィールドノートからの引用した車椅子ソフトボールの試合の様子である。2017年の日本選手権の初戦の様子である。

> チームは初回の攻撃で4点を奪い，2回の攻撃では大学生に打席がまわる。先頭バッターが塁に出て，体の大きい，パワーが売りのAが打席に。彼は野球部ではエースピッチャー。初球をフルスイングするがファール。すると，相手ピッチャーが審判に何かクレームを

つけた。どうやら，打者がバットを振る際，足が車椅子から外れて地面についたために，アウトではないかと言ったようだ。アンパイアはその抗議を受け入れなかったが，Aは不満げに相手ピッチャーを睨む。ベンチからは「力むな，力むな」の声が飛ぶ。次の球，Aはフルスイング。完全に力んで高く打ち上げてしまう。しかし，その打球が内野と外野のちょうど間に落ちてチャンスが広がる形に。ラッキー。一塁ベース上で不満げな顔をするAにチームのベンチからいじるヤジが飛ぶ。その後，チャンスでヒットが続き，3点奪う。ベンチに戻ってきたAは「あのピッチャーむかつく」と大きな声でいう。チームメイトは落ち着かせるように「結果オーライ，結果オーライ」と言うが，彼の怒りはまったくおさまらない。

車椅子ソフトボールの活動の内実を見ていくと，大学生の障害者スポーツ活動への参加を「支える」という言葉で説明することは適切でないように思える。なぜなら，彼らはあくまでスポーツ活動そのものに参加し，そして楽しんでいるためである。車椅子使用者のメンバーと同じように，真剣にプレイし，喜び悔しがる。

こうしたスポーツの楽しさを基盤とした車椅子使用者と大学生の関係はとても面白いものである。社会人であり年上である車椅子使用者は大学生に対し後輩や弟のように接し，両者は「体育会系のノリ」で付き合ってもいる。例えば，大会後の打ち上げや飲み会では車椅子使用者と大学生はくだらない話で盛り上がり，2次会で朝方までカラオケに行く。こうした飲み会では先輩である車椅子使用者が大学生におごることがほとんどである。こうした両者の関係は〈支えられる側－支える側〉や〈障害者－健常者〉という単純な関係構造で理解できるものではない。

その一方で，大学生たちが「ボランティア」と表現する活動も存在する。筆者が参加した障害者スポーツの普及活動にも，大学生が数名参加していた。このチームでは日々の練習や試合だけでなく，車椅子ソフトボールの普及活動を行っている。その活動の中心となっているのが，車椅子ソフトボールの体験会である。こうした活動に積極的に関わり，中心となっているのは車椅子使用者の人びとだが，その手伝いとして大学生メンバーも参加する。この普及活動はある地域の体育館で行われ，車椅子ソフトボール以外の複数の競技を体験するものであった。地域で暮らす障害のある人びとやその家族，あるいは障害者スポーツに興味のある健常者が参加し，実際に障害者スポーツを体験してもらうことで普及につなげていこうという狙いがある。このイベントで大学生は車椅子ソフトボールの用具の運搬・搬入，競技説明の補助，体験会のサポートなどを行っていた。彼らは午前9時から準備を手伝い，12時までそのイベントのサポートを行っていた。イベントが終わると，大学生は車椅子使用者のチームメンバーの車で大学に戻り，午後3時からいつものようにチームの練習に参加した。練習の前には車椅子使用者から体験会に参加した大学生に対して感謝が述べられたのだが，そのなかで体験会に参加しなかった別のメンバーが「どうだった？」と訪ねたのである。そして，体験会に参加した大学生は「ボランティア疲れた」と答えたのである。筆者は練習後に，体験会に参加したメンバーに「なぜ体験会をボランティアと表現するのか」と質問した。それに対する大学生の答えは「このチームのための活動ではないから」「障害者スポーツのために活動しているから」というものであった。

以上のように，大学生はチームの活動すべてをスポーツ活動への参加と認識しているわけ

ではない。彼らは自身が所属し競技を行うチームへの関わりはスポーツ活動として認識している。その一方で，車椅子ソフトボールの普及や障害者スポーツ全般に関わる活動に対しては，ボランティアと認識しているのである。「スポーツ活動／ボランティア活動」という境界線は自身が競技に参加しているか／他者の競技に対する関わりか，という点で引かれていると理解できる。

つまり，彼らはボランティアを他者のための「利他的な行為」と理解しているため，自身が競技に参加しているチーム活動はボランティアとは意味づけられないのである。反対に，障害者スポーツの普及やチャリティーイベントへの参加は他者のスポーツ活動への貢献をともなう，利他的な行為と解釈されているわけである。以上から，大学生の車椅子ソフトボールチームへの関わりは以下のように整理できる。第一に，大学生は車椅子ソフトボールチームにおいて，障害のある人びとともに競技し，楽しんでいること。第二に，大学生にとって，車椅子ソフトボールチームへの参加は，支える活動やボランティア活動ではなく，スポーツ活動そのものへの参加であること。彼らは障害のある人びとのスポーツ活動を支えているのではなく，ともに競技を楽しんでいるのである。

4-4 支え合う関係，楽しみの共有，結果として支える

ここまで，車椅子ソフトボールチームへの大学生の関わりを見てきた。ここから見てとれるのは，チームの活動において，車椅子使用者と大学生が〈支えられる－支える〉という関係で固定されているわけではない点である。あるいは，〈障害者－健常者〉というカテゴリーのみで関係性が成り立っているわけでもない。もちろん，大学生が競技用の車椅子の乗り換え支援を行う場面も見られるが，常に大学生が車椅子使用者を支えているわけではない。例えば，車椅子使用者が大学生の使用する競技用の車椅子の微調整を行うこともあるし，車椅子使用者が車で試合会場への大学生の送迎を行う場面も見られる。大学生が競技者として参加しているこのチームでは大学生が車椅子使用者を一方的に支えるのではなく，支え合う関係にある[7)]。

では，何がこうした支え合う関係を可能にしているのだろうか。まず指摘できるのは，車椅子使用者と大学生の関係がスポーツの楽しさを基盤にしたものである点である。両者はチームメンバーとして，日々の練習で競技を楽しんでいる。そして，試合で勝った場合は喜びを，負けた場合は悔しさを共有する。先に見たように，大学生は真剣に車椅子ソフトボールをプレイしており，スポーツを通した楽しみがまず両者の関係の基盤となっている。

次に，車椅子使用者の存在が大学生の競技や試合への参加を可能にしている点である。車椅子ソフトボールではクラス分けと持ち点制がルールとして設けられているが，このシステムによって健常者は競技に参加可能となっている。しかし，チームの出場選手の合計持ち点に上限があるために，健常者のみでは試合に出場することはできない。つまり，大学生が競技に参加するためには低い持ち点の存在，すなわち車椅子使用者の存在が必要不可欠なのである。反対に車椅子使用者が競技に参加するためには，大学生がチームに加わることが必要であり，車椅子ソフトボールの競技特性とルールにおいて両者は互いに必要不可欠な存在となっている。

最後に，大学生が障害のある人びとのスポーツ活動を支えるために「ボランティア」を行っているのではなく，彼らが競技を楽しむことが結果として障害のある人びとのスポーツ活動

を支えることにつながっている点である。車椅子ソフトボールチームでは大学生が車椅子使用者の活動を支えるための存在するのではなく，スポーツをともにプレイし楽しむために，両者が協働してチームの活動を成立させているといえる。大学生はあらかじめ障害のある人びとのスポーツ活動を支えるために参加しているのではなく，まずプレイヤーとして，チームのメンバーとして加わる。それが結果として支えるという状況を作り出し，こうした支援のあり様が支え合う関係を作り出しているのである。

5. おわりに　競技参加型ボランティアの可能性

本稿の目的はスポーツにおける障害者とそれを支える健常者の関係性に着目することから，障害者スポーツ・ボランティアの可能性を示し，ボランティア・支援に関する新たな研究視角を模索することである。最後に結論にかえて，障害者スポーツ・ボランティアの可能性について，重要な部分を強調しつつ整理しておきたい。

ボランティアは自発的な意志に基づき他者や社会に貢献する行為や活動であり，困難な状況にある人びとを助ける「利他的な行為」である。しかし，原田や崎山らが指摘したように，それは支援をする側からそれを受ける側への権力的な働きかけでもある。ボランティアや支援の現場では，受ける側が負い目感情を抱いたり，する側の支援が受ける側の思いやニーズとすれ違うことがよくある。そのように考えた場合，両者の間に生じる権力的な関係を組み替えていくことが重要になってくる。しかし，ボランティアは一般的に自発的な意志に基づき他者や社会に貢献する行為と理解されるため，〈ボランティア－受け手〉という関係構造を前提に，ボランティアから受け手への働きかけが重要視される。つまり，いかにしてボランティア側がより良い支援を行うことができるかが問われ，その活動において形成される関係性を問い直すことが難しくなるのである。

このようにボランティア論・支援論の課題を捉えたとき，本事例における障害のある人びとと健常者の関係のあり様はとてもユニークなものであり，学ぶ点も多い。ここまで見てきたように，車椅子ソフトボールチームでは大学生が障害のある人びとやそのスポーツ活動を支えているようで，実はともに競技を楽しんでいた。このチームでは大学生たちも競技を楽しみ，「ボランティア」としではなく，チームの一員として活動に参加していた。つまり，健常者をボランティアや支援者に位置づけるのではなく，プレイヤーとして競技に取り込むことで，楽しさを基盤とした関係を作り出していたのである。確かに，大学生たちは障害のある人びとのスポーツ活動を支える重要な人的な資源といえるが，彼らは決して周辺的に参加しているわけではないのである。大学生はあくまで車椅子ソフトボールをプレイし，チームにメンバーとして参加しており，それが結果として車椅子使用者のスポーツ活動を支えていることにつながっていたといえる。大学生の「プレイする」という行為が障害のある人びとを「支える」という行為に結果的につながっているのである。また，健常者が障害のある人びとをいつも支えているわけではない。本事例に見られるのは健常者が障害者を支えるための仕組みというよりは，ともに競技を楽しむことが結果として支えることにつながっている，そういった支援のあり様といっていいだろう[8)]。

ここでは「プレイする」と「支える」というふたつの行為が分離しない障害者スポーツ・ボ

ランティアの形態を「競技参加型ボランティア」と表現しておきたい。これまでの先行研究やスポーツ・ボランティアに対する語りが「するスポーツ」と「支えるスポーツ」を分離させて考えてきたのに対し，車椅子ソフトボールではこの二つの行為が混在する形で両者の活動が展開されていたのである。そして，競技やプレイを基盤にそれが結果として支えることにつながっていることには大きな実践的な意義も見いだせるだろう。なぜなら，スポーツをともにプレイすることを基盤とした両者の関係は，ボランティアとその受け手の間に生じる権力的な関係をうまく編み直すことに成功しているように見えるためである。車椅子ソフトボールチームでは大学生を競技に組み込むことで〈支える側－支えられる側〉を前提としてない活動が展開されており，それによってユニークな活動や関係が可能になっている。車椅子使用者が大学生たちに競技や車椅子に関するアドバイスをし，車で送迎することもある。一般的なボランティアに見られる〈支える側－支えられ側〉という関係性を前提としないために，車椅子使用者と大学生は支え合う関係性を作り出すことに成功しているのである。

ボランティア論・支援論において重要なのは，ボランティアをする側がその受け手に一方的に働きかけるような形の活動として捉えるのではなく，両者による協働の可能性を考えることではないだろうか。ボランティア論・支援論は支える側から支えられる側への働きかけを前提として，「良い支援」を模索する。しかし，より重要なのはボランティアとその受け手がどのように協働し，〈支える－支えられる〉という関係を編み直しているかではないだろうか。障害者スポーツに見られる障害のある人びとと健常者の協働はボランティアや支援における〈支える－支えられる〉という当たり前の関係性を問い直す重要な視角を提示している。

注

1）その他の参加動機に関する研究としては田引（2008）の研究などがある。また，障害者スポーツ・ボランティアに関しては，障害者に対するイメージや意識の変容を明らかにした研究（高畑, 2005; 藤田, 2015）もある。

2）車椅子ソフトボールの歴史，ルールや特性については大西ら（2016）を参照のこと。

3）チームの活動には大学生以外の健常者も参加している。例えば，H大学野球部のOBや大学関係者などである。

4）クラスⅠは「腹筋，背筋の機能がないもしくは弱く，座位バランスが悪い。主に損傷部位がT-7以上」，クラスⅡは「腹筋，背筋の機能があり，バランスが保てるが，下肢の機能および旋回動作が弱い。主に損傷部位がT-8からL- 2」，クラスⅢは「 下肢の機能があり，旋回動作も十分にできる。主にL-3以下または下肢切断。健常者も含む」と定められている。

5）障害者スポーツにおけるクラス分けと持ち点制については渡（2012）を参照のこと。

6）車椅子ソフトボールのクラス分けにおいて特徴的なのは，Qクラスという特別なクラスが設置されている点と女性の持ち点である。クラスQは「脊椎損傷者。およびそれに準ずる上肢に障害がある」と定められており，このQクラスの選手を必ず一人加えた10人でチームを作らなければならない。また，女性は該当するクラスの持ち点から2点を引いたものが持ち点となる。Qクラスの選手の参加を義務付けること，女性の持ち点を低くすることで，多様な身体状況の人びとが参加できるように工夫されているのである。

7）健常者が障害のある人びとの車椅子の乗り換えを手伝っている光景を見たとき，私たちはそれを「支える」行為と見なすだろう。しかし，それがスポーツにおけるチームメンバー間での行為であるとしたらどう感じるだろうか。スポーツ活動では用具の用意や片付け，体育館のモップがけ，グラウンドの整備などは当たり前に誰かが行うものである。部活やクラブのなかで，こうした行為は「支える」や「ボランティア」と

は捉えられないはずである。しかし，なぜか障害のある人びとと健常者の間での行為となると，用具の準備や片付けですら，「支える」行為に見えてしまう。

8）筆者は車椅子使用者と大学生の協働がうまく行かない場面に何度か遭遇している。2018年11月の土曜日に行われた練習での出来事であった。その日は練習時間になっても，大学生がなかなか体育館に集まってこなかった。その理由は翌日に野球部が公式戦を控えていたためであった。練習において，野球部員の参加が少ないことは練習メニューに影響を与えるだけではなく，雰囲気にも大きな影響を与えているようにも見え，その日は通常より短い1時間30分で終了してしまったのである。ここに競技参加型ボランティアの難しさが見て取れるだろう。車椅子ソフトボールチームでは大学生，健常者の不在が障害のある人びとの競技やプレイそのものに大きな影響を与えてしまう点である。プレイするという行為と支えるという行為が分離していないため，大学生の不参加が競技に直接的な影響を及ぼすのである。こうした競技参加型ボランティアの課題については今後の課題としたい。

参考文献

原田隆司, 2000,『ボランティアという人間関係』世界思想社.

原田隆司, 2017,「『ボランティア』とその周辺―関係性という観点からの考察―」『現代スポーツ評論』37, 31-43.

藤田紀昭, 2015,「知的障害者スポーツ大会へのボランティア参加による障害者に対する意識変化に関する研究」『同志社スポーツ健康科学』7, 9-16.

文部省, 2000,「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議」.

二宮雅也, 2017,『スポーツボランティア読本「支えるスポーツ」の魅力とは？』悠光堂.

西山志保, 2010,『ボランティア活動の論理―ボランタリズムとサブシステンス―』東信堂.

大西昌美・斎藤雄大・堀江航, 2016,「車椅子ソフトボールにおけるルールブックとクラス分け制度の作成について」『北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報』7, 1-14.

大山裕太, 2015,「ボランティアコーチに対する知的障害者の評価に関する一考察―スポーツ場面の参与観察を通して―」『北海道教育大学紀要　人文科学・社会科学編』62（2）, 57-66.

崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井きよ編著, 2008,『〈支援〉の社会学―現場に向き合う思考―』青弓社.

笹川スポーツ財団, 2014,「スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究」.

塩田琴美・徳井亜加根, 2016,「障がい者スポーツにおけるボランティア参加に影響を与える要因の検討」『体育学研究』61, 149-158.

田引俊和, 2008,「障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究」『医療福祉研究』4, 98-107.

高畑隆, 2005,「精神障害者に関する意識上のバリアの研究」『埼玉県立大学紀要』9, 9-13.

武隈晃, 1997,「『スポーツボランティア』概念の周辺」『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』48, 57–70.

谷幸子・中比呂志・山下秋二・清田美絵, 2003,「障害者スポーツボラティアの類型化に関する研究―活動期待の視点から―」『体育・スポーツ経営学研究』18（1）, 1-12.

山口泰雄, 1998,「ボランティア活動の広がりと『スポーツを支える活動』の振興」『スポーツと健康』30（6）, 23-25.

山口泰雄, 2004.「スポーツ・ボランティアの可能性」山口泰雄編,『スポーツ・ボランティアへの招待―新しいスポーツ文化の可能性―』世界思想社, 1–16.

山田力也, 2002,「身体障害者スポーツ実施者からみた〈クライアントーボランティア〉関係に関する研究」『レジャー・レクリエーション研究』48, 1-11.

山下博武・行實鉄平, 2015,「スポーツ・ボランティアに関する研究動向―スポーツ経営学からの批判的考察―」『徳島大学人間科学研究』23. 39-55.

渡邊秀司・新矢昌昭, 2004,「ボランティアと『純粋贈与』―日本語支援ボランティアへの聞き取り調査から―」『仏大社会学』29, 30-41.
渡正, 2012,『障害者スポーツの臨界点―車椅子バスケットボールの日常的実践から―』新評論.

Sociological Research on Sports Volunteers for the Disabled: Focusing on the Relationship between Sports Practitioners and Volunteers

Takashi YAMASAKI, Shun UETA

Key words

Disability sports, sports volunteers, sports participation volunteers

Abstract

The purpose of this paper is to show a new theoretical and practical perspective on volunteering from fieldwork on sports for persons with disabilities.

First, we summarize the concept of sports and volunteering and show that it is perceived as a "supporting" sport. Next, we focus on sports for the disabled and discuss the involvement of healthy volunteers as athletes. And the relationship between the disabled and the able-bodied is formed on the basis of the enjoyment of sports, and they support each other and organize daily sports activities.

Finally, we define volunteers for sports for the disabled as "sports participation volunteers" and consider the possibilities of volunteers for sports for the disabled. "